

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (1/3)

学部・学科	臨床心理学部・臨床心理学科		職名	講師	氏名	カトウ ナナコ 加藤 奈奈子
学歴	平成16年 3月 京都大学教育学部教育科学科 卒業 平成18年 3月 京都大学大学院教育学研究科 (修士課程) 臨床教育学専攻 修了 平成22年 3月 京都大学大学院教育学研究科 (博士課程) 臨床教育学専攻 単位取得満期退学					
学位	平成18年 3月 教育学修士 (京都大学)					
専門分野	臨床心理学 (心理臨床学)					
専門資格	臨床心理士 (第16672号)					
所属学会	平成16年11月 日本心理臨床学会 平成19年 9月 日本箱庭療法学会 平成24年 5月 日本ユング心理学会					
受賞						
担当授業科目	学 部 初年次演習、コミュニケーションスキル演習、臨床心理学実践演習 (箱庭療法6)、心理学実験査定 (初級) ・ 、心理学実験査定 (中級) A・B、臨床観察実習					
論文指導	論文指導担当 [主査] (卒論 : 該当なし) 論文審査担当 [副査] (卒論 : 7名)					
F D 活 動 ・ 教 育 実 績	科目名	科目カテゴリー	実施学期	履修者数		
	心理学実験査定 (中級) B	講義 ・ 演習 ・ 実習 ・ 実験	春 ・ 秋	13名		
	授業の概要 : 心理学の調査手法の一つである観察法についての知識を深めるとともに、グループで観察法の調査デザインを組み立て、調査を実施し、調査の分析結果をまとめ発表する。					
	教育活動の振り返り 教育活動の成果 : 本授業は卒論作成のための調査手法の可能性を広げるべく本年度より初めて担当した教科であったため、「授業をよりよくするアンケート」を用いて、受講生の率直な声を聞いた。その結果、グループでの調査活動という形式をとったことによって「観察法」という受講生にとっては馴染みの薄い調査手法を、和やかな雰囲気の中、素朴な疑問の延長上に位置づけるといったことはできたのではないかと思われた。 今後の課題 : 観察法の奥深さに理解が追いつかず、調査デザインにそうした専門的な部分を上手く取り入れることができなかったと感じている受講生がいる一方で、もう少し専門的なことを学びたいと感じている受講生がいることがアンケートより明らかになった。今後はこうした個人差を少しでも是正すべく、一人一人への理解度をいかに深めていくかを目標に個人対応ができるような授業プランを考えていくことが課題である。					
	・ 学内外のFD関連講演会/セミナー等への参加実績 学内 2014年度 第1回FD講演会「京都文教大学の初年次教育を考える ジェネリック・スキルを育てるための科目間連携 」に参加。初年次演習などの初年次必修科目と他科目との連携に関してグループディスカッションを通してその課題を検討した。					
・ 教育効果が高い、あるいは教育の一環として行われている課外活動等 オフィスアワーの時間では、卒論を執筆している学生に対して、質問紙調査の分析手法についての質問に答えた。また、同時に卒論に関する文献および研究のための文献を紹介することも行った。質問に来た受講生の多くは、心理学実験査定 (初級) や心理学実験査定 (中級) の授業で昨年度担当した実習生であり、心理学実験の基礎をベースに卒論が位置づけられていることが伺え、そうした基礎科目からの連続性を感じることができた。						

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (2/3)

<p>H26 年度 研究課題</p>	<p>1. 心理臨床におけるfamiliarityの研究 2. 長期閉鎖環境への適応および帰還後再適応に対する心理的サポートについての研究</p>
<p>平成 二 十 六 (2014) 年度の研究活動の概要</p>	<p>1. 普段の臨床活動において収集された事例から、いくつかの事例に共通して考えることができる項目をあつめ、先行研究で補充していく作業を行った。その中で学生相談の中から感じられた、大学生におけるメディア媒体の中の登場人物に対する親和性 (familiarity) に関して、大学生における主体感覚を軸に論文化をすすめていたが、その作業の中で調査の必要性を感じたため、現在調査デザインを構築し、平成27年度に実施する予定である。 また、日本箱庭療法学会や研修会などに参加し、事例報告を聞く中で自らの事例の見方が恣意的になっていないかを確認するとともに、論文作成のための準備をした。日本箱庭療法学会での体験記をまとめた。またそうした学会参加をもとに、現在「デジャヴ体験とfamiliarity」に関する論文を作成中である。</p> <p>2. これまでの南極越冬隊員への継続的な心理調査の結果をニュージーランドで行われたSCARにおいて同じ調査チームである川部哲也氏「Changes over time of mood and mental health during five Japanese Antarctic Research Expeditions」、鳴岩伸生氏「Relation Between positive(and negative)affects and coping with stress experienced by Japanese wintering parties in Antarctica」の両発表について発表内容をチームで検討し、発表補助も行った。また同学会において南極医学研究の世界的な動向について情報収集を行った。その結果、閉鎖環境でのストレスにおけるプレ学習の重要性が感じられ、こうした視点への研究を目的に「長期閉鎖環境下での主観的評価と生理指標にみるストレス予防に関する実証研究」を挑戦的萌芽研究で申請中である。 また、第54次越冬隊員に対するフィードバックと帰国後調査を実施し、越冬中のストレスに関して何うとともに越冬後の再適応の問題についての情報収集を行った。 後述 : (調査活動)</p>
<p>平成 二 十 六 (2014) 年度 の 主 な 研 究 成 果 等</p>	<p>(著書) (論文) (学会報告、学会活動) (その他、エッセイ・翻訳・学術講演等) (調査活動) 平成26年12月 第54次南極越冬隊員に対するフィードバックおよび帰国後調査 (学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含) 平成24年度-平成26年度 科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金 (挑戦的萌芽研究)「長期閉鎖環境への適応および帰還後再適応に対する心理的サポート方法の開発」(課題番号24653202, 研究代表者: 京都光華女子大学・人文学部・准教授 鳴岩伸生) 研究分担者 (学内活動) 自己点検・評価 学生サービス専門委員会委員、学生委員会委員、学生相談室運営委員会委員</p>
<p>社会 に お け る 活 動 (2014) 年度 の 主 な 研 究 成 果 等</p>	<p>・ 社団法人青葉学園 心理士「平18.3より」</p>
<p>平成 二 十 一 〜 二 十 五 (2009~2013) 年度 の 主 な 研 究 成 果 等</p>	<p>(著書) 1. 「南極に生きるこころ」、共著、平成21年6月、ナカニシヤ出版、子安増生編、桑原知子・鳴岩伸生・川部哲也・佐々木玲仁分担執筆、心が生きる教育に向かって 幸福感を紡ぐ心理学教育学 (pp.124 ~ 145)</p>

平成 26 (2014) 年度 教員活動報告書 (3/3)

平成二十一～二十五 (2009～2013) 年度の主な研究成果等	<p>(論文)</p> <p>1. 「特別養護老人ホームに箱庭を持ち込む試み 「鮮やかさ」という視点の生成」、共著、平成23年8月、日本心理臨床学会 心理臨床学研究29(3)、(pp.317-328)</p> <p>2. 「“違和”から感じられる「私」～伊坂幸太郎『マリア・ビートル』をよむ時の感覚から～」、単著、平成23年3月、京都大学カウンセリングセンター紀要第40輯、(pp.43-50)</p>
	<p>(学会報告、学会活動)</p> <p>1. 「箱庭の「鮮やかさ」に関する試論 特別擁護老人ホームにおけるグループワークより」、共同、平成21年9月、日本心理臨床学会第28回大会、東京国際フォーラム</p> <p>2. 「南極越冬隊員の心的体験について(4) 南極越冬隊員に関する帰国後のインタビューから」、共同、平成21年9月、日本心理臨床学会第28回大会、東京国際フォーラム</p> <p>3. 「Recognition of “I” sense – the creation of an artificial ouroboros state」、単独、平成21年11月、2nd Inter School Forum on Child Analysis, Milan</p> <p>4. 「南極越冬隊員の心的体験について(5) 南極心理調査における自由記述の分析から」、共同、平成22年9月、日本心理臨床学会第29回大会、東北大学</p> <p>5. 「南極越冬隊員の心的体験について(6) 南極越冬隊員に対する帰国後インタビューの分析から」、共同、平成23年9月、日本心理臨床学会第30回秋季大会、福岡国際会議場</p> <p>6. 「南極越冬隊員の心的体験について(7) バウムテストに表れた指標の時期変化に着目して」、共同、平成24年9月、日本心理臨床学会第31回秋季大会、愛知学院大学</p>
	<p>(その他、エッセイ・翻訳・学術講演等)</p>
	<p>(調査活動)</p> <p>平成20年 5月 特別養護老人ホーム「小川老人ホーム」における箱庭療法「平22.3まで」</p> <p>平成24年11月 第54次南極越冬隊員に対する心理調査</p> <p>平成25年 1月 第52次南極越冬隊員に対するフィードバックおよび帰国後調査</p> <p>平成25年11月 第55次南極越冬隊員に対する帰国後調査のお願い、医療越冬隊員との顔合わせ</p> <p>平成26年 3月 第52次南極越冬隊員に対するフィードバックおよび帰国後調査</p>
	<p>(学外研究資金による研究活動・科学研究費補助金等含)</p> <p>平成24年度 - (3年間)</p> <p>科学研究費助成事業・学術研究助成基金助成金(挑戦的萌芽研究)「長期閉鎖環境への適応および帰還後再適応に対する心理的サポート方法の開発」(課題番号24653202, 研究代表者: 京都光華女子大学・人文学部・准教授 鳴岩伸生) 研究分担者</p>
	<p>(学内活動)</p> <p>平成24年 4月 人権委員会委員「平26.3まで」</p> <p>平成25年 4月 自己点検・評価 学生サービス専門委員会委員「現在に至る」</p> <p>学生委員会委員「現在に至る」</p>
平成二十一～二十五 (2009～2013) 年度の社会における活動	<p>(NPO法人等の団体への参画)</p> <p>平成22年 4月 京都大学教育学部同窓会幹事「平24.3まで」</p> <p>日本箱庭療法学会事務局員「平24.3まで」</p> <p>(その他)</p> <p>平成18年 3月 社団法人青葉学園 心理士「現在に至る」</p>